

ニホンザル研究林

研究林実行委員会

本研究所には幸島野外観察施設があり、草分け時代からすれば、すでにほぼ30年の研究史を有し、完備した個体追跡資料を抛り所に、多彩な研究がつづけられてきた。その学問的寄与は甚大であり、今後さらに発展が期待される。しかし一方ニホンザル本来の生息条件からすれば、孤立した1群が約30ヘクタールに生息するという箱庭的サンプルであることは否めない。多くの群れが連続分布し、群間関係をふくむ多様な生活が営まれるところこそ、ニホンザルが進化をつづけ、適応している舞台である。

幸島以外でも、高崎山・嵐山はじめ多くの野猿公苑、また餌づけされない純野生群についても観察等が行われ、相補って研究を進展させてきた。しかし野猿公苑は、一部を除いて研究者の管理外にあり、餌づけという条件以外にも、無数の限界があった。一方純野生群は、近年の森林開発と、それに関連ある害獣化のもとに、年間捕殺数2,000頭という数字が示すように、まことに不安定な状況におかれ、計画的研究が保証されない。

かかる状況下には、典型的なニホンザル生息地を、その生息環境とともに確保し、理想的な半永久的研究を可能にすべきだという、切実な願望がおこり、この研究林構想が打ち出された。

対象にしたのは、管理が国の責任で行われている国有林とし、ニホンザル分布の北限である下北、南限である屋久島、そして中核部としての中部、これには多雪の表日本型を代表する上信越、寡雪の表日本型を代表する木曽を選び、計4地点がとりあげられた。それとともに各地点での準備的研究も開始されたが、昭和48年度に下北に特別事業費予算がつき、58年度に上信越がというように、その実現は遅々たるはこびとなっている。しかし4研究林の実現は、ニホンザル野外研究を確実にする必須条件と考えており、将来幸島野外観察施設を発展解消し、5カ所から成るニホンザル野外観察施設を設けることは、本研究所の重大な任務であり、将来の野外研究の主軸を形成することであると、決意ならびに抱負を抱いている。

昭和54年度におけるニホンザル研究林関係の活動状況はつぎのとおりである。

1. 下北研究林

下北半島西北部（佐井村、大間町、風間浦村、大畑町）の生息域では、主として冬季の観察条件の良い時期に、群れの個体数、性年令構成、行動域、土地利用の年次変化を追跡してきた。1978年以来、Z、Mの2群は40頭以上の大きなあつまりを作るようになり、観察条件は人づけの成功もあって良い。とくにM群では、遊動する群れでの社会学的観察が緒につきはじめた。I、Zの両群では、行動域の周辺部への拡大がみられ、Zでは、以前のコー・エリアと推定される材木川の利用度が減少し、行動域のシフトが起りつつあることが確認された。（この変化は猿害の発生につながる危険があり、今後の追跡調査が計画されている）

西南部（脇野沢村・佐井村）では、餌づけ群下北A群の分裂過程と生態管理のための基礎調査（日本モンキーセンターを中心とする委託調査）に、足沢貞成が当たった。分裂群と主群の相互関係と、その土地利用への影響などにつき、周年の調査を行なった。

両地域の調査には、あしの会（森 治代表）北大ヒグマ研究グループ、弘前大などの協力を得た。

2. 上信越研究林

1971年から1979年にわたる雑魚川及び魚野川のスルの生態調査のまとめが行なわれ、それに基づいてあらたな調査が始まった。

雑魚川流域のスルの冬期生態が、糞、樹皮、ハミートによる食性調査、雪上の足跡追跡による群れの広がりに関する調査として行なわれた。

横湯川流域のスルの食物になる果実生産量調査がseed trap法によってひきつづき行なわれた。果実生産量と関係して志賀C群の遊動調査が行なわれた。

志賀A群は1979年冬にA₁及びA₂群に分裂した。A₂群を自然状態にもどす試みが行なわれ、その変容過程の追跡観察が行なわれた。

横湯川流域の土砂崩壊防止の工事が1978年から行なわれ、工事道路が作られつつある。この場所はC群の遊動域内なので、工事関係者に注意を喚起している。調査小屋の整備と共に、調査研究は新たな段階に入りつつある。

3. 木曽研究林（候補地）

期待された国費は今年も見送りとなったが、共同研究（田中 進・村松正敏両共同研究員）、学生実習をふくめ、7回延105日の調査が行われた。

サルが人慣れしたこともあって、一部の個体識別がはじめて行われ、習性上の発見も多くなされた。冬季にはかえって奥山へ入るが、苛烈な生息条件にもかかわらず、個体数の減少もなく、とくに衰弱した徴候を示さなかった。

4. 屋久島研究林（候補地）

本地域での調査活動は、屋久島研究グループによる共同利用研究（計画）によってすすめられている。

研究林予定地域のほぼ中央に位置する旧K。群の分裂によって生じた3群と1つの近接群について人づけ個体識別にもとづく分裂過程の追跡が丸橋、黒田、山極らを中心にすすめられた。

また、その他5つの群れについて個体数、性年令構成の変動データが1974年以降の継年調査でえられていて、全域の群れの概況も明らかになりつつある。

スマトラ自然研究計画による霊長類研究

スマトラ島は、本島だけで日本全土よりひろく、大小の属島群をふくめ、大半が未開発区域である。現生霊長類だけでも、オランウータン、4種のテナガザル、3種のマカク、5種のヤセザル、5〜7種の原猿類が住み、種の豊富さは世界でも抜ん出た存在である。

昭和49年度にはじまるヤセザル類の比較社会学的研究が、インドネシア側研究者との密接な協力下で約5年間展開され、成功裏に終わったが、その第2期計画に当り、さらに植物（森林生態・分類）・昆虫生態の2分野を加え、霊長類学とともに、スマトラおよび属島の生物自然のより総合的な研究に発展せしめることとなった。この新計画は、昭和55〜59年度の5年間とし、54年度にその準備が行われた。その結果、日本学術振興会の特定国間学術交流の一環としてとり上げられることとなり、いくつかの民間財団が支援することとなった。研究計画の中軸となるのは、インドネシア国立アングラサス大学に、博物館の要素を含む研究室を建設することであり、目下のところ国の文教予算には、かかる施設を国外に建設する準備がなく、民間に頼らざるを得ない。研究費の面では、科研費も充当されることになっている。

さて霊長類学の分野では、先ず以前からの継続である、ヤセザル類にマカク類を加え、その社会・

生態的側面が追求され、しだいに他の系統にも及ぶ予定である。形態および系統学的観点からの研究も重要視されているが、とくにスマトラは、かつてデュボアが最初の古人類化石を求めて成功せず、ジャワに移ってピテカントロプスを発見したという因縁の地でもあり、古霊長類学上の追求が期待される。この他、遺伝学および生化学的側面からの努力も加えられる予定である。

これまでの経過から、スマトラ自然研究計画のセンターは当研究所におかれ、計画促進委員会には、委員長他3名の委員が出ている。なお計画を支援する募金委員会があり、総長を会長に、事務局長・関係部局長の参加をえて活動をはじめている。

計画には上記の研究室建設と研究そのものの他に、両国の若い研究者を育てる意図を盛り込み、未開発の自然研究が有する社会的意義の認識のもとに、日・イ両国の親善と発展の一石としても役立ちたいと考えている。

（川村俊蔵）

大学院学生

昭和54年度における京都大学理学研究科動物学専攻霊長類分科の学生、指導教官および研究テーマは次のとおりである。

氏名	学年	指導教官	研究テーマ
渡辺邦夫	D3	川村 俊蔵	メンタウエイに生息する霊長類に関する比較社会学的研究
菅原和孝	D3	河合 雅雄	ヒヒ類の種間関係についての社会学的研究
B. S. グレワル	D3	河合 雅雄	ニホンザルにおける活動様式と行動の社会生態学
J. ブルトン	D3	川村 俊蔵	湯河原におけるニホンザルの社会行動および社会構造の分析
十川和博	D3	高橋 健治	霊長類の組織タンパク質の分解機作の研究